兵庫県人権啓発活動シンボルマーク

ひょうご人権ジャーナル

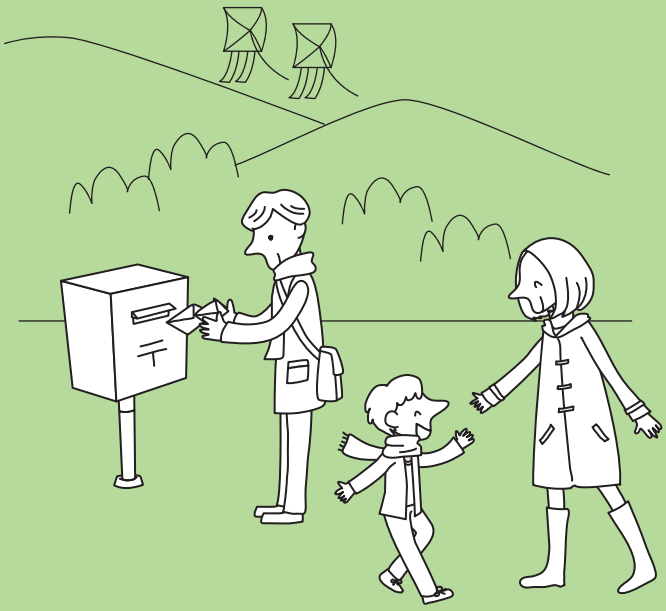
きずな

2012年
（平成24年）
1

特集テーマ

震災と人権

確かめあう「絆」



2 人と人のつながりで拓く兵庫の未来
井戸敏三（兵庫県知事）

3 まちのKIZUNAリポート
県立舞子高校環境防災科（神戸市垂水区）

4 被災地は、今

6 震災、昨日 今日 明日
三浦暁子さん（エッセイスト）

7 震災から学ぶ 支え合うまちづくり・つながりづくりに向けて
室崎益輝さん（関西学院大学総合政策学部教授・ひょうごボランタリープラザ所長）

8 東日本大震災に寄せて

10 東から―東日本大震災後を生きる視点
奥田知志さん（NPO法人北九州ホームレス支援機構理事長）

11 ふれあいサロン

12 情報ぷらざ

1月17日　防災とボランティアの日

1995（平成7）年1月17日に発生した阪神・淡路大震災において、市民によるボランティア活動が活発化したことを受け、同年12月、ボランティア活動への認識を深め、災害への備えの充実強化を図る目的で制定されました。また、1月15日～21日は「防災とボランティア週間」と定められています。

兵庫県・（公財）兵庫県人権啓発協会

人と人のつながりで拓く兵庫の未来

兵庫県知事
（公益財団法人兵庫県人権啓発協会会長）
井戸敏三

昨夏、台北の駐大阪経済文化弁事処長から私のもとに一通の手紙が届きました。東日本大震災に対するお見舞いの言葉とともに、台中市健民小学校の募金活動の様子が綴られていました。この小学校は12年前の台湾大地震で大きな被害を受け、兵庫からお送りした義援金によって校舎を再建した学校です。「今こそお世話になった友人に恩返しを」と、募金活動を開始し、被災地へ届けられたとのことです。

日本円で約２００万円にあたる67万１０７４台湾ドル。なぜ額が端数なのか。子どもたちがわずかなお小遣いを削って集めたお金だからです。募金に励む子どもたちの姿や心を思うとき、支え合い、助け合いの輪が国や地域の壁を超えて広がっていることを実感しています。

東日本大震災という未曾有の悲劇のなかで希望となったのは、こうした絆です。声を掛け合い、手を取り合った地域の人々のつながりが、まちを襲う大津波から多くの命を救いました。避難所の運営や炊き出しの中心となったのも、被災地のコミュニティです。また、全国からたくさんのボランティアが駆けつけ、被災地の大きな力と励ましになりました。

人と人とのつながりの再生こそが、安全安心の地域づくりの基本になる。このことを改めて思い知らされました。

先般、県民の皆様とともに見直した「21世紀兵庫長期ビジョン」の中で、特に強調したのがこのつながりの再生です。

兵庫のめざすべき将来像の一つとして、家族の絆と多様な縁に支えられながら、一人ひとりが尊重され、自立し安心した生活を営める社会を描きました。また、その実現に向けた協働シナリオとして、家族で過ごす時間の創出、地域ぐるみでの子育て応援、住民主体による日常生活の支え合い、そして「共生の心」を培う人権意識の高揚などを掲げました。今後、地域社会を構成する県民、地域団体、企業、行政などさまざまな主体が協働し取り組んでいきます。

厳しい時代だからこそ、ともに描いた兵庫の未来をめざし、夢を持って歩んでいこうではありませんか。

本年もどうぞよろしくお願いします。

特集

震災と人権

東日本大震災から間もなく10カ月。被災地では復興に向けた取り組みが進んでいますが、高齢者や障害のある人への支援、長期にわたる避難生活への配慮、風評被害などの人権に関連した問題も起きています。

命の尊さ、ボランティア精神や思いやりの心の大切さなど、阪神・淡路大震災から学んだことも振り返りながら、今一度、人と人の絆を深めることの意味を考えてみましょう。

まちのKIZUNAリポート

防災を学ぶ全国唯一の高校

県立舞子高校環境防災科（神戸市垂水区）

被害の大きさに最初は戸惑いつつも、生徒たちはがれきの片付けや家屋の泥のかき出しなどをしました

環境防災科の軌跡をまとめた諏訪さんの著書「高校生、災害と向き合う―舞子高校環境防災科の10年」（岩波ジュニア新書）が昨年11月に発売されました。

東北の被災地で支援活動

県立舞子高校の環境防災科は全国で唯一の防災教育専門の学科。生徒たちは自然災害と防災の関係や災害のメカニズム、災害に強いまちづくりなどを学んでいます。

2002（平成14）年の開設以来、全国で自然災害が起こると、生徒たちは被災地に出向いてボランティア活動に取り組んできました。東日本大震災の被災地でも、がれきの片付けや家屋の泥のかき出しのほか、コミュニティー再生の一環として祭りの準備も手伝いました。

「被災地に4回訪ねて気付いたのは、地域によって復興の進み具合が異なること。被災地の実情から学ぶことは多々あります」と2年生の久保力也さん。教員志望の彼は「授業と被災地で学んだことを合わせ、将来は子どもたちに命の尊さを伝えたい」と話します。

2年生の辻村佑季さんは被災地の人から「過去の津波の被害から学んだことが身を守ることにつながった」と教えられ、「防災学習の大切さをあらためて実感しました」と深くうなずきます。

防災教育と人権教育の目指すもの

「被災地に関する新聞記事などは自然といつも見るようになり、日頃から被災地で撮った写真や記録で活動を振り返るようになりました」と久保さん。環境防災科の教諭、諏訪清二さんは「生徒たちは被災地で活動したことで、自分の考えをしっかり持ち、積極的に行動するようになりましたね」と語ります。

環境防災科では昨年10月、岩手県と宮城県の中高生を招き、設立10周年記念行事として「防災教育全国交流大会」を開催。震災体験や復興への思い、防災学習の課題などを語り合いました。何人かの生徒は連絡先を交換し、余震が起こると安否を確認したりしているそうです。

諏訪さんは「人権教育も防災教育も目指している基本は、命の大切さを学ぶこと」と言います。「東日本大震災では防災教育によって助かった命もあると言われています。防災教育ができていないのは人権教育ができていないのと同じ。生徒たちは被災地で経験したことを生かし、次のステップに踏み出してほしいです」とさらなる成長に期待を寄せます。

取材ノートから 特別編

被災地は、今

東北地方の被災地では避難所から応急仮設住宅への入居が進むなど、復興に向けて新たなステップを踏み出しています。宮城県でさまざまな支援活動に取り組んでいる人を取材しました。

阪神・淡路大震災の経験を生かしたコミュニティーづくりをアドバイス

震災から10カ月近くたった今も、兵庫県から多くの人が被災地に出向いてボランティア活動に取り組んでいます。神戸市長田区の真野地区まちづくり推進会の藤原柄彦（もとひこ）さんもその一人。藤原さんは現在、阪神・淡路大震災の経験を踏まえ、仮設住宅のコミュニティーづくりに何が必要か、高齢者や障害のある人の目線にも立って活動しています。仲間らとともに、風雨を避けるため仮設住宅の玄関先を囲う風除室を設置したり、仮設住宅での自治会設立にアドバイスしたりしています。

「自治会ができれば自分たちの生活課題の解決に向けて、行政の協力も得やすくなり、それが一日でも早い自立へとつながります」と藤原さんは語ります。

▲各戸の玄関先に風除室を設置しました

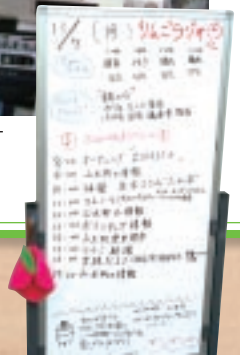
▲「高齢の方や障害のある方も不自由なく生活できるコミュニティーが必要」と語る藤原さん

▶ひょうごボランタリープラザの呼び掛けで集まった兵庫県のボランティア隊は宮城県山元町へ。西脇市の本坊佳高さんは「大学時代の後輩の家が津波で家を流されたこともあり、少しでも役に立ちたいと思い参加しました」

▲藤原さんの仲間には美容師も。仮設住宅の皆さんに整髪のサービスをしました

被災者に欠かせない地域密着のラジオ局

▲放送は8時から18時まで。詳しくはりんごラジオのホームページへ
http://ringo-radio.cocolog-nifty.com/



一人ひとりの支援を無駄にしない「循環型支援」に取り組む

宮城県亘理（わたり）町を中心に活動する「亘理いちごっこ」では、支援者から被災者への「資金（物資）」「労力」「こころ」が一方通行にならないよう、「循環型支援」の仕組みづくりを提唱しています。

「支援者の中には、お金は出せるが被災地に足を運ぶ時間はない人もいれば、お金はそれほど出せないが被災地で長期的に活動できる人もいます。循環型支援とは支援者一人ひとりの〝こころ〟を最大限に生かす仕組みです。例えば食事を提供する場合、まず、全国から寄せられた資金で食品を購入し、地元の支援者が被災者に届けるというものです」と代表の馬場照子さん。

循環型支援は多岐にわたります。「いちごっこお話聞き隊」として仮設住宅を巡回し、高齢者や一人暮らしの人の話し相手になったり、「寺子屋いちごっこ」を開いて子どもたちの勉強を見たりしています。

▶亘理いちごっこでは11月、支援物資が住民に均等に行き渡ることと、住民同士の交流を目的に買い物イベント「わたりモール」を開催。悪天候にもかかわらず多くの人が来場しました

◀亘理いちごっこの代表、馬場さん。毎日の活動はブログ（http://watari-ichigokko.blogspot.com/）で発信しています

震災直後、情報網が寸断された被災地では生活情報の発信拠点として災害臨時ＦＭラジオ局が次々と誕生しました。宮城県山元町の「りんごラジオ」は震災の10日後に開局。同町在住で、かつて仙台でアナウンサーをしていた代表の高橋厚さんは、町内各地の被災状況などを伝え、全町民の気持ちが一つになるように努めたそうです。

「震災後間もなく、被災児童が校歌を歌う様子を放送しました。その歌声からは明日へのパワーが感じられ、思わず目頭が熱くなりました」

現在は生活情報やボランティア情報のほか、「山元町歴史散歩」といったほっと一息つける番組も放送。地元商工会などが復興イベントを開いた時は、会場から中継し、参加者たちの声を集めました。リスナーから寄せられるメールやはがきは増えており、りんごラジオが町民に浸透していることがうかがえます。

「以前インタビューした中学生が『震災前の何気ない生活が幸せなのだと痛感した』という言葉が印象に残っています」と高橋さん。

町特産のリンゴと、戦後の日本を元気づけた「リンゴの唄」に思いを込めて名付けられたラジオ局は、被災地に多くの笑顔の花を咲かすため、今日も情報を発信します。

◀スタジオには著名人のメッセージ入りの色紙が並んでいます

▲「町民同士をつなぐツールとしてりんごラジオを育てていきたい」と語る高橋さん

震災、昨日 今日 明日

三浦 暁子（みうら あきこ）さん　エッセイスト

1995年1月17日、私は神戸の自宅で、阪神・淡路大震災に遭遇した。震度7の揺れは、今も強烈な記憶となって、私の中にある。

「地震の記憶を風化させるな」と、人は言う。確かにその通りかもしれないけれど、その記憶にとらわれていては、生きていけないというのが私の実感である。いつも地震にそなえて生活することは不可能だ。地震直後はガスレンジをつける手が恐怖で震え、風呂の水を抜くのが憂鬱（ゆううつ）で湯舟に溜（た）めたままにしておいた。息子が外に遊びにいくのも嫌で、家の中で遊びなさいと命令したくなった。また地震が起きたらどうしようと、不安になるのだ。

それでも、私は忘れようとつとめた。ガスをつけなければ食事は作れないし、湯を溜めっぱなしにしておくとお風呂場のタイルはカビだらけになる。息子の行動をコントロールできるはずもなかった。当時、小学校6年生だった息子は、同じクラスの友達を亡くし、傷ついていた。せめて外で遊び回り、元気を取り戻して欲しい。

地震直後、息子に聞かれたことがある。「なぜ友達のKちゃんは死ななければならなかったのか」、と。彼女は優しく、皆に好かれるよい子だった。それなのに、家に押しつぶされて亡くなった。おかしいじゃないか。何も悪いことをしていないのに、どういうことだ。息子は憤り、悲しそうに私に迫るのだった。

私はその問いに答えられないまま、ただ漫然と日を重ねた。地震のあとも同じマンションに暮らし続け、今もそこに住んでいる。息子だけが大学生になって上京し、神戸を後にした。私たちは地震の話などしなくなり、そして、2011年3月11日を迎えた。

東北で大きな地震があったらしいと知らせてくれたのは、東京にいる息子だった。あわててテレビをつけた私は見てしまった。大地が津波にのみ込まれるあの映像を。そして、思った。これから先、「なぜあの子が、なぜあの人が」という問いが、何万回も繰り返されることになるのだ、と。

なぜなのだろう。なぜ一生懸命生きていた人たちがあんな亡くなり方をしなくてはいけないのだろう。阪神・淡路大震災以来ずっと考えないようにしてきたあの問いが、再び私を苦しめる。自然は私をおびえさせ、ガスの火をつける手がまた震え出す。

けれども、大人になった息子はもう私に質問などしない。彼は今、アメリカのカリフォルニアに留学している。カリフォルニアは地震の巣。今後30年の間に巨大地震に見舞われる可能性は99・7パーセントだという。それでも、彼はそこで暮らすことを選んだ。

「なぜあの子が？」という問いを「私」が言う日がないよう祈ってはいるが、絶対にないとは言い切れない。大地は人をはぐくみ、守り、実りを与える一方で、突然、命を奪う。私たちにできるのは、今このときにしがみつきながら、大地にへばりついて生きていくことだろう。

プロフィール
1956（昭和31）年、静岡県生まれ。上智大学文学部卒業。エッセイストと主婦という二つの立場から、自らの体験を通し生き方や幸せ論を問い掛ける。1996（平成8）年に『大震災、主婦の体験』を出版するなど、著書多数。神戸市東灘区在住。

2011.3.11

震災から学ぶ 支え合うまちづくり・つながりづくりに向けて

室崎 益輝（むろさき よしてる）さん
関西学院大学総合政策学部教授
ひょうごボランタリープラザ所長

「つながり」の分断

あの未曾有（みぞう）の大災害から10カ月が経過しました。時間がたてば、被災者の傷もそれなりに癒えていくのが普通ですが、今回の東日本大震災に限ってそれは当てはまりません。時間がたつほど傷口が広がっていく状況が顕著です。

その傷口の広がりは、生きていくための「つながりの分断」という形でみることができます。家族とのつながり、仲間とのつながり、地域社会とのつながり、さらには仕事とのつながりが、連鎖しながらズタズタに切れ、挙句の果てに、行政とのつながりも故郷とのつながりも切れてしまいました。

家族とのつながりの分断は、死別という形だけでなく別居という形でももたらされています。別居は、遠隔地への避難や都市復興の遅れによって、広範囲にもたらされています。被災地に行くと、子どもの顔を何カ月も見ていないという人が、いかに多いかがわかります。非常事態であればあるほど家族が手をつないで頑張らないといけないのに、放射能の危険、その他の理由で家族が別居しないといけないというのは、とても残酷なことです。

今回の震災で、特に留意しなければならないのが、仕事との分断と故郷との分断です。多くの人が仕事を失い故郷を逃げるように離れていく事態が、どんどん進行しています。時間が経過するにつれ、もう被災地には戻らないという人が増えているのです。被災地には、仕事も住む場所もないからです。慣れ親しんだ今までの農業や漁業をあきらめて、生計のために都会で慣れない仕事に就く人が、少なくありません。

全ての被災者との「つながり」をめざして

この故郷を離れる人が多いということは、被災地の復興や存続に関わる深刻な問題点でもあります。復興で立派な住宅が高台にできても、そこに住む人がいないという状況が生まれかねません。被災地に雇用を生み出さないと、人口減少の危機は乗り越えられないし、故郷に住む権利も奪ってしまいかねない状況が生まれます。この故郷に住む権利が奪われるということでは、放射能汚染地域や津波浸水地域において居住制限や建築制限がかけられていることが、その是非はともかくも、離散や別離という残酷な結果を生み出す大きな要因となっています。

さて問題は、こうした分断や別離の中で、被災者が次第に行政のセーフティネットの網から漏れて、見えなくなっていることです。この「見えなくなる被災者」に対しては、つながりが切れないように、元通りの素晴らしい町を一刻も早く再建することも大切ですが、新天地で新たなつながりを獲得できるように支援することも大切です。「見えなくなる被災者」をいかにして捕捉し、いかに支援するかが、福祉の観点からも人権の観点からも喫緊の課題となっているのです。

プロフィール
1944（昭和19）年、尼崎市生まれ。1967（昭和42）年、京都大学工学部建築学科卒業。神戸大学都市安全研究センター教授、独立行政法人消防研究所理事長、消防庁消防研究センター所長を経て、2008（平成20）年に関西学院大学総合政策学部教授、2010（平成22）年にはひょうごボランタリープラザ所長に就く。日本火災学会賞、日本建築学会賞、都市住宅学会賞などを受賞。主な著書は『地域計画と防火』『建築防災・安全』など。

東日本大震災に寄せて

「きずな」7月号で読者の皆さんから東日本大震災に関する原稿を募集したところ、9月末の締め切りまでに多くの体験記や詩などが寄せられました。編集室で選んだ3作品を紹介します。

ふるさと福島への思い

ペンネーム **橋本華子さん**（福島県郡山市から神戸市に避難）

3月11日、私たちの生活は突然、変わりました。

午後2時46分、福島県郡山市の自宅は、いきなりすごい揺れに襲われました。テレビが落ち、家中の物が飛び、腰が立たなくなりました。夜、家族がそろった時は無事で良かったと安堵（あんど）しました。

翌12日、埼玉の長男が心配して駆け付けてくれました。ツイッターを見ながら家の片付けをしていた長男は、「だめだ！原発が危ない。ここを出よう」と叫んだのです。相談の結果、夕方6時頃に家を出て埼玉に向かいました。福島を出るまでの建物や道路はむちゃくちゃな状態で、渋滞でなかなか進みません。やっとの思いで13日の夕方6時頃、ようやく長男の家に着きました。16日まで長男の所にいましたが、その後、娘と孫、私たち夫婦は、長男の「西へ、とにかく西へ」の言葉で、埼玉を出て神戸をめざすことになりました。17日の朝、被災者を支援してくださるとの情報を得て、ようやく神戸まで来ることができました。現在、神戸の皆さんにはとても感謝しております。本当にありがとうございます。

今にして思えば、ここまで原発が危険なことになっているとは知らず、2、3日で帰るつもりで家を出たのですが、原発の状況が報道されるにつれ、不安でなりません。その後、夫は仕事があり、福島に戻りましたが、これからどうすればいいのか、これからの福島が心配です。

地震だけなら自分たちの力で再建に取り掛かっていたと思います。でも「原発事故」です。見えない恐怖が私たちを襲います。私たちが住んでいた福島県中通りは、自主避難区域とはいえ、放射線量が高い地域です。放射線から身を守るため、家を密封しようにもサッシや壁がゆがみ、天井は落ちて傾き、風が抜ける状態では密封状態にできません。

6月に長男の車が東京の駐車場で紙に包まれたことがありました。福島ナンバーだからでしょうか。あの時感じた「福島」と言うだけで、避けるような世間の反応…。

生まれ育った福島の山や川、街並みを恋しく思うことがあります。孫は神戸の小学校に元気に通っていますが、友達との別れもなく出て来たためか、前の小学校を思い出すことがあるようです。

これからの福島を思うとき、安全は？安心は？そして子どもたちの未来はどうなるのか知りたいです。そのためにもより正確な情報をハッキリ出してほしいと願うばかりです。

兵庫県の被災地支援情報はホームページをご覧ください

兵庫県では被災者就労支援や仮設住宅でのコミュニティーづくりアドバイザーの派遣など、東日本大震災の被災地へさまざまな支援事業を実施しています。兵庫県のホームページでは各事業の内容をはじめ、ボランティア情報や被災者電話相談の窓口案内なども紹介しています。

兵庫県／東日本大震災 被災地支援情報　検索

一人ひとりができる支援を

梅田美佐子さん（宝塚市）

あの瞬間、テレビの映像が信じられませんでした。言葉が出てこないばかりか、体の震えが止まりませんでした。とっさに「同じ職場で働いていた同僚が、確か岩手に戻ったはず…」。その瞬間から、その方の安否が気に掛かり仕方がありませんでした。

宝塚市が現地に送る肌着や靴下を集めていることを知り、励ましの手紙を添えて、すぐに市役所へ届けました。街のあちこちで呼び掛けられた募金も、いくら入れたのか自分自身でも分からないくらいです。「たくさんの所へ届け」と一心に祈りました。新聞記事からパソコンで調べた宮城県南三陸町へ、乳児用の物資も送りました。また、岩手県へは、雑巾を復興の手掛かりにしていると聞き、早速、糸と針を送りました。

私が住んでいる小学校区でも、皆が集まり、何ができるか考え行動しました。現地へ行った人もいれば、私みたいに支援物資を送った人もいます。それぞれの立場でできることを考えました。

阪神・淡路大震災との違いを考えると、津波で何もかも失い、家族、家、職場、すべて流された現実を目の当たりにし、同じ復興という言葉でも、その意味の違いを大きく知らされた気がします。私たちの経験は役に立たないかもしれませんが、せめて思いや気持ちは届けたい。集まりに参加した一人ひとりがあらためて考える良い機会となったのではないでしょうか。

集まった方たちとお話する中で「これから家族で考えたい」と言ってくれた方もいれば、現地へ行った方もおり、その方からは現地の状況を見た瞬間の苦しい胸中もうかがえました。私は行方の分からなかった元同僚と連絡が取れ、「生きている」と喜んだものの、次の瞬間、これからの生活のことを思うとどう言葉を継げばいいのか、気持ちがすごく重たく感じたのを覚えています。

今回、被災された皆さんのことを思い、こうした経験を「忘れない」気持ちを大切にしたいと思います。

命

山本光範さん（加西市）

世界にたった一つだけの
キラキラと光って輝いて
笑って　歌って　泣いて怒る
大切なものが助かりました

その　とても大切なものを
亡くなられた人たちの分も
力強く生き抜いて
あなたも私も　前進します

きずなライブラリー ～おすすめの一冊～

春を恨んだりはしない ―震災をめぐって考えたこと

池澤夏樹著（中央公論新社）

本格的な春の到来を前に発生した東日本大震災。あれから10カ月近くが過ぎた今、被災地では復興に向けた確かな槌音が日に日に大きく聞こえてきます。本書は被災地に何度も訪れた著者が、被災した人々の悲しみや苦悩の表情から感じたことを綴っています。自然の脅威を前にして、人間は無力です。しかし、被災者たちは次の春に向けて立ち上がろうとしています。カメラマン鷲尾和彦氏のモノクロ写真が被災者のたくましさを伝えます。

読後、後書きの「社会の非力を経て、一人一人の被災者の悲嘆、支援に奔走する人たちの努力などの全部を書きたかった」という一文に、納得させられるのではないでしょうか。

特別寄稿

東から―東日本大震災後を生きる視点

奥田 知志（おくだ ともし）さん
NPO法人北九州ホームレス支援機構理事長

NPO法人北九州ホームレス支援機構理事長の奥田知志さんは、東日本大震災後、「『絆』プロジェクト北九州」の立ち上げに参加し、被災地から避難してきた人に対する支援活動に取り組んでいます。これまでの活動を通して、復興に対する思いを寄せていただきました。

3月11日から10カ月。死者・不明者は2万人に迫り、避難生活者は数万人。放射能被害の深刻さには震撼（しんかん）せざるを得ません。以来、大きな穴がぽっかりと空いたような感覚に陥っています。

苦難の中で、人の心には大小さまざまな穴が空き、そこから冷たい風が吹き込んできます。人はなんとかその穴を埋め、風が入らぬように努力します。手で押さえ、それで足らなければ何か他のものをもってきてあてがいます。ですが、どうしても隙間が残ります。その隙間から冷たい風が漏れてきます。苦しい現実です。

しかし、心に空いた穴が埋まらないのならば、思い切ってそこから何が見えるか、穴を覗（のぞ）いてみてはどうでしょうか。穴の空いていない時には見えないものが、その穴を通して見えたりします。何万人という人々の中にある悲しみの穴を通して新しい世界が見えてきます。穴の空いていない時には見えなかったものが、見えたりします。

私は、今回の大災害と大事故からの復興は、被災地にとどまらず日本社会そのものの再創造になると思っています。そうであるなら「被災地を元気な地域が助ける」ということだけで果たして良いのか問われているのです。復興のデザインは、下からの視点、あるいは悲しみのどん底から見えた風景、風穴から見えてきます。

悲しみに寄り添うとは、共に悲しんで、共に泣くだけを意味しません。それは、その人の心の中に空いた風穴から世界や自分を見直すということです。そこに復興のデザインが見えてくるのではないでしょうか。

日本中が「被災地のために何ができるか」を模索しています。「被災者支援」は、多くの場合「東日本へ何を届けられるか」を意味します。ですが、この「東へ」が気になります。「東から聴く」ということが欠けているのではないでしょうか。当然「被災者を助ける」は大事です。でも、それだけでいいのでしょうか。

しばしば被災地を訪ねる中で、多くのことを問われ、多くのことを学んできました。苦難のどん底に生きる人々こそが見、考えることに耳を傾ける。被災地においてこそ認識できることがあるのです。苦難の外にいる私には見えないこと、感じることができないことを彼らが気づいているのではと思います。この特権がない人たちが、復興を支援するには「彼らを助ける」以前に「彼らから聴く」という姿勢が必要なのだと思います。

「被災地のため」と言いつつ、被災地から学び、問われることのない支援はむなしいと感じます。私は、新しい時代は苦難の地「東から」来ると思っています。日本社会は「東から」新たな希望を見出します。日本変革のエネルギーは最も苦しんだ人たちが、期せずして持たされた認識論的特権に宿ると考えています。20年以上路上の声を聴き、進むべき方向を示してもらい生きてきました。「東へ」ではなく「東から」。

このパラダイム転換が起こらない限り、この国は新しくならないのかも知れません。

プロフィール

1963（昭和38）年滋賀県生まれ。関西学院大学神学部、同大学大学院修士課程を経て、西南学院大学神学部専攻科を卒業。1990（平成2）年、北九州市の東八幡キリスト教会の牧師に。2000（平成12）年、NPO法人北九州ホームレス支援機構を設立し理事長に就任。2009（平成21）年にはNHKテレビ「プロフェッショナル 仕事の流儀」に出演。

ふれあいサロン

読者からのお便り

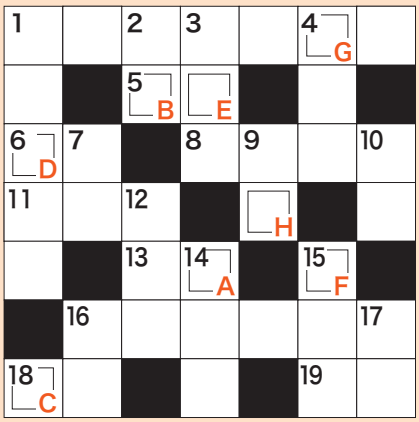
●11月号「インターネットと人権」を読んで、インターネットに関するいろいろなことが分かりました。楽しくて便利な半面、ウイルスなど恐ろしい面も多いのですね。早く怖い面は改善されてほしいですが、何といっても使う人間のモラルが大事だと思います。
（上郡町・藤本静枝さん）

●勤務校をネットで検索すると不動産関係の掲示板に行き当たりました。そこには勤務校の過去の良くない噂が書き込まれている一方、今の良い状態のこともたくさん書き込まれています。このままでよいのだろうかと思わされます。
（神戸市・クニくんクニちゃんクニさん）

●和崎宏さんの寄稿「災害とインターネット」は今後の災害対策に示唆を与えるものです。科学技術か伝統的手法かの対立的個別的でなく、組み合わせにより効果的に運用できると思います。
（高砂市・岡田幸三さん）

「きずな」のバックナンバーは、当協会または各市町の人権啓発担当部署にお尋ねください。

クロスワードを解いて、A〜Hの文字を順番に並べると、何という言葉になるでしょう？



タテのカギ

1 教え諭すこと。この大惨事を○○○○○として次に生かしたい
2 ○○原発を望む声が大きくなっています
3 この重みを再認識した人が多かったようです
4 多くの人が○○○の手を差し伸べてくれました
7 水生動物の呼吸器官
9 木から出るねばねばした液体やそれが固まったもの
10 「世も○○」なんてことはありません。希望を持ち続けることが大切です
12 捕獲・食肉が世界から非難を浴びている水生ほ乳類
14 勇気を奮い起こすこと
15 思わず漏らすため息
16 震災直後の赤ちゃん誕生で「○○共に元気」の報に周囲の皆が元気づけられました
17 三原色の一つ、情熱の色です

ヨコのカギ

1 マグニチュードがおおむね8以上の揺れ
5 ○○突き合わせている場合じゃない
6 ○○を向いて歩こう
8 物事をするのによい機会。好機。○○○○到来。
11 ○○○を共にした仲間たち
13 自分の才能や仕事に自信を持ち、誇らしく思うこと
16 多くの人が自発的に駆け付けてくれました
18 ○○たんたんと機会をうかがう
19 日本文学者のドナルド・キーン氏は大震災を機に日本に○○し、日本と共に生きることを決意しました

〈11月号の答え〉**フィルタリング**

お便り掲載者　クロスワード正解者（抽選）　特製カードケースをプレゼント!

「読者からのお便り」の投稿掲載者（3月号に掲載）とクロスワードの正解者（抽選で10人）に特製カードケースをプレゼント。本誌「きずな」のご意見やご感想、人々とのふれあいを通した心温まるエピソードなどを募集しています。どしどしご投稿、ご応募ください。※投稿はペンネームの使用も可能です ※当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます

■応募方法・締め切り
はがきかファクス、メールで受け付け。クロスワードの答え、郵便番号・住所、氏名（ペンネームを使用する場合も要併記）、電話番号、年齢、職業、本誌へのご意見・ご感想を書いてください。2月3日（金）締め切り（必着）

■応募先
〒650-0003　神戸市中央区山本通4-22-15 県立のじぎく会館内
（公財）兵庫県人権啓発協会「きずな編集室」
TEL 078（242）5355　FAX 078（242）5360　✉info@hyogo-jinken.or.jp

※投稿者と応募者の個人情報は適切に管理し、誌面づくり以外の目的には利用しません

情報ぷらざ

字幕副音声付き／36分

平成23年度人権啓発DVD&ビデオ
「桃香の自由帳」が完成しました
「共生社会と人権」～つながり・ささえあう わたしたちのまち～

核家族化や都市化によって、同じ地域に住む人同士が名前さえ知らなかったり、相手のことを誤解して排除したりするなど、私たちは気づかないうちに「人とのつながり」を断ってしまうことがあります。

このドラマは、劇的な事件は描かず、どの地域でも起こりうる出来事に光を当てています。日常の何気ない言動を振り返ることで、私たちが見失いつつある、人と人とが寄り添い、共に生きる温かな世界とは何かについて考えさせられます。DVDとVHSビデオの2種類があります。

出演／星奈優里、志村東吾、毛利恋子、伴杏里、長内美那子、浜田晃　ほか
企画／兵庫県、(公財)兵庫県人権啓発協会　　企画協力／兵庫県教育委員会
製作／東映㈱

●貸し出しについて　(公財)兵庫県人権啓発協会研修部 TEL 078(242)5355
●購入について　東映㈱関西営業推進室 TEL 06(6345)9026

イベントガイド

宝塚市 心のふれあう市民のつどい	**●日時**／1月18日(水)13:00～15:30 **●場所**／宝塚市立東公民館　※阪急「山本」駅から徒歩約5分 **●内容**／講演：松木正さん(マザーアース・エデュケーション チーフ・ディレクター) 人権啓発作文朗読 **●問い合わせ**／宝塚市人権男女共同参画課　TEL 0797(77)9100
尼崎市人権・同和教育研究協議会 平成23年度人権・同和教育 実践研究大会	**●日時**／1月26日(木)13:00～16:50 **●場所**／尼崎市立中央公民館　※JR「立花」駅から尼崎市営バス「西難波北」下車、徒歩約3分 **●内容**／講演「人権文化を考える」上原善広さん(ノンフィクション作家)、分科会 **●問い合わせ**／尼崎市教育委員会社会教育室　TEL 06(6489)6746
㈳兵庫県精神障害者家族会連合会 平成23年度阪神地区 精神保健福祉研修会	**●日時**／1月30日(月)13:00～16:30 **●場所**／いたみホール　※阪急「伊丹」駅から徒歩約3分 **●テーマ・講師**／「地域で安心して暮らしていくために」 三田優子さん(大阪府立大学人間社会学部社会福祉学科准教授) **●問い合わせ**／㈳兵庫県精神障害者家族会連合会　TEL 078(891)3871

ハーフタイム

今号の被災地の取材で、宮城県亘理町立山下中学校の渡辺修次校長にお会いしました。高台にある同校は、校舎自体に大きな被害がなかったことから避難所になりました。実は、渡辺校長は震災の直前まで大病を患い入院されており、職場に復帰して間もなく震災に遭いました。自宅は全壊し、8人の教職員の家が津波で流失しました。そのような状況の中、渡辺校長は責任者として、教職員とともに、避難住民の場所割りや食事の手配など、避難者が自立できるプログラムを組み、奔走されました。結局、病み上がりにも関わらず無理をしたことで、1カ月後には再びダウン。しかし、この間、住民の皆さんが自主的に活動できるように心を砕いた結果、この避難所では大きなトラブルもなく、皆さんは仮設住宅に入居されたり、自宅に戻られたりしたそうです。

避難している人の様子は頻繁(ひんぱん)に報道されますが、裏方で活躍されている人のことは案外知られていません。取材者としてそのような方々の苦労や思いをしっかり伝えなくてはと痛感しました。現在、渡辺校長は震災直後のことについて講演を依頼されることもあるそうです。取材の終わりに校長はこう言われました。「自分が今回経験したことを話すことで恩返しができると思っています」。渡辺校長の思いが生徒たち、次の世代に受け継がれていくことを願ってやみません。(田中)

(公財)兵庫県人権啓発協会　〒650-0003　神戸市中央区山本通4-22-15　県立のじぎく会館内
TEL 078(242)5355　FAX 078(242)5360　info@hyogo-jinken.or.jp

兵庫県人権啓発協会　検索

2012(平成24)年1月発行